外国貿易の効率について

鈴木重靖

はしがき

私は前稿「中国の外国貿易の効果と収益性」（本誌第三十六巻第一号）において、社会主義国の外国貿易の効果と収益性に関する中国の諸論者の見解を紹介検討し、且つ外国貿易の効果と収益性が中国の現状においてどのようにあらわれているかを試論的に論じた。しかしここにおいてはなお対象から除外された問題がいくつかあったし、また補足すべき点もいくつかあった。本稿は前稿において残されたこれらの問題を論じようとするものであり、したがって前稿の続編ともいわるべきものである。前稿で残された本稿の対象となった主たる問題は大約次のようである。(1)中国の外国貿易の効率を品目別に、国内価格と輸出入価格との関聯において調査検討する。(2)同じ問題を社会主義市場と資本主義市場とに別けて地域別に調べてみる。(3)外国貿易の短期的効率だけでなく長期的効率についても考えてみる。(4)社会主義世界市場、社会主義国際分業における中国の地位を研究し、これによって中国が社会主義世界市場、社会主義国際分業からうける現在及び将来の恩恵と、反対に中国が社会主義世界市場、社会主義国際分業に現在及び将来において果す役割を検討する。

一

先ず社会主義貿易にとってその効果とは何であり、いかなる貿易をもって効率的といいうるのか、これについて極

く簡単に述べてみよう。

いうまでもなく資本主義国における貿易の目的は、それによって利潤を実現することである。国際分業による労働節約、労働生産性上昇、生産力増大はそれが利潤上昇に役立つ限り意味があり、したがってそれ自身が効果の基準ではない。効果の基準はあくまで利潤である。その証拠に、いかにその国の生産力増大のために必要な生産設備であっても、またそれが価格的にまたその他の条件において有利なものであっても、この生産設備の輸入がこの国の競争産業の利潤にマイナスの影響をあたえる場合には、この生産設備の輸入は屢々制限され阻止されることがありうる。このような例は国際分業の利益＝生産力増大効果が利潤効果に完全に従属していることを物語っている。このように資本主義社会における外国貿易の効率の大小は利潤の大小（直接にせよ間接にせよ）によってはかられるし、また当然そうでなければならない。社会主義国の貿易の目的はこれとは基本的に異なる。社会主義国の貿易の直接の目的は国際分業による労働節約、労働生産性上昇、生産力増大であり、究極の目標はこれにもとづいて人民大衆の物質的文化的慾求を最大限に充足することである。勿論社会主義社会においても貿易によって関聯企業の『利潤』は上昇する。しかしそれは単なる目的に対する手段であり、あるいは効果に対する一つの指標にすぎない。直接の目的あるいは効果はあくまで労働生産性上昇、生産力の増大である。あるいはこういってもいい。資本主義国家の外国貿易においては利用されるのが国際分業による生産力増大であり、その成果の対象となるのは価値、価格、利潤である。がこれに対し社会主義国家の外国貿易においては利用されるのは価値、価格、利潤であり、その成果の対象となるのは国際分業にもとづく生産力増大である、と①。

このように社会主義国における外国貿易の直接の目的が国際分業による生産力の増大であるならば、その外国貿易が効果のあるものであるかどうか、またその外国貿易の効率がどの程度の大きさのものであるかを決定するものは、

その外国貿易によって生産力が増大したかどうか、増大したとすればどの程度増大したかということでなければならない。勿論資本主義国の外国貿易におけると同じように、社会主義国の外国貿易にも単に経済的目的のみでなく政治的文化的目的もある。ある意味では社会主義貿易においては後者の目的が資本主義貿易以上に重要性をもっているということも出来よう。たとえば外国貿易による国家間の友好・平和の維持が社会主義国にとって非常に大きな意義をもっていることは周知の通りである。が、これとても終局的には社会主義国の生産力の発展に役立つのである。しかしこのような政治的文化的目的は別としても外国貿易による国際分業にもとづく生産力増大は、これを更に分けて考えれば三つに分つことが出来る。その一つは外国貿易＝国際分業を通してその国の生産性を高め生産力を拡大するのに役立つ技術的に高い労働手段なり生産要具、また良質な労働対象を獲得することである。これはいわば国際分業による生産力増大の質的（品質上の）側面であり、いわば外国貿易の生産能性増大効果とよばるべきものである。もう一つはその国の一定の経済発展率を維持するために必要な、その国に事実上缺乏する財貨を外国貿易＝国際分業を通して確保し、もってその発展率と結びついた一定の社会主義的拡大再生産過程の物財の釣合関係を保証すること。これも国際分業による生産力増大の質的側面であるが、前の効果が品質上の側面ならこの効果はむしろ品種上の側面であり、いわば外国貿易のバランス効果とよばるべきものである。最後は国際分業による労働の直接の節約、国際的専門化、いわゆる比較生産費原理にもとづく労働の節約である。この場合には国際分業および外国貿易にくみ入れられるものが、どのような種類の財であるか、またそれがどの程度高い品質のものであるかは直接には関係しない。したがってこれはいわば外国貿易の労働節約効果といわるべきものである。勿論これら三つの効果はそれぞれバラバラに切離されたものではなく相互に関聯あるものである。いかに第三の効果が高くても第二の効果を無視してはその国の生産力の全体的長期的発展は望まれないであろう。また第一の効果も——特に社会主義国の発展の初期には——第

三の効果以上に重要性をもつことがある。どの効果が特に主要な側面をもつかは、国により、発展段階により、時代により異なるであろう。

第一の効果は第二、第三効果にして変化ないとすればより優秀な生産手段がどれだけ輸入されているかによってその大いさがはかられる。いまここで中国の輸入品のうち生産手段についてその一つ一つがどの程度優秀なものであるかを説明するつもりはない。しかし次のことから判断してこの第一の効果が必ずしも低いものでないことは大方理解出来よう。中国は大体食糧品と繊維原料及びその製品等の消費財を輸出して、機械および設備、鉄鋼製品、石油及び石油製品等の生産財を輸入するという貿易の商品構造をとっている。最近数年間の中国の輸入の九〇％は生産手段であり②、また過半は機械設備であり、またその約五〇％がソ連からである。が、いずれにしても第一効果の量的大きさを正確に数字的大いさでもって算定することは全く不可能というわけではないが非常に困難であろう③。

第二効果の大いさはその国の産業がどの程度外国貿易に依存しているか、特にその国で事実上産出不可能か、あるいは不可能でないにしてもその生産に非常に多額の費用を要するような財をどの程度依存しているか、またこれらの財はこの国の経済にとってどのような地位をしめる産業部門の財であるかといったことに関係する。中国の貿易依存度は正確なことは不明であるが大体輸出入合計で国民所得に占める比率は一〇％前後であろうといわれている⑤。これはあまり高い方ではない。また輸入商品の構成をみても中国において生産不可能なような輸入原料乃至その加工品は殆どなく、比較的不足しているものは石油ぐらいで他の大部分のものは中国に存在する原料資源乃至その加工によって生産可能なような製品である。このようにみれば中国は可能性としては自己完結的な産業構成をもち、したがって、またその再生産構造も自己完結的、自主的な形態を維持しうる能力をもっている。しかしながらこのことから中国の貿易には第二効果は少ないと結論することは出来ない。何故ならば輸入商品の多くが機械および設備、鉄鋼製品、

第1表　中国の対ソ輸出入商品構成の変化（%）

（輸出）

	1953	54	55	56	57	58	59	60	61
総額	100	100	100	100	100	100	100	100	100
食糧および飲料	25.7	20.0	18.5	16.7	14.3	10.4	10.1	20.1	3.4
食糧加工品、半加工品	18.7	25.7	25.4	23.8	15.2	22.9	17.1		
非鉄および合金属および鉱石	21.5	18.4	18.4	16.5	19.2	13.7	11.7	13.9	16.2
繊維原料	12.2	9.6	9.2	7.7	6.6	4.3	8.3	7.7	4.1
繊維製品	3.6	6.4	9.1	12.3	18.0	21.0	32.2	39.1	54.7
動物性工業原料	3.7	4.3	4.2	4.0	3.5	3.3	2.5	1.2	0.6
その他	14.6	15.6	15.1	19.0	23.2	24.2	18.1	18.0	21.0

（輸入）

	1953	54	55	56	57	58	59	60	61
総額	100	100	100	100	100	100	100	100	100
機械および設備	23.1	26.2	30.7	41.6	49.9	50.2	62.0	61.6	29.5
(内、工場設備一式)	7.1	12.3	18.9	29.6	38.4	26.2	31.9	45.7	25.0
鉄鋼製品	9.8	11.6	10.9	8.5	6.3	9.8	5.2	6.7	9.4
非鉄製品	1.9	2.9	1.7	2.4	1.5	2.5	0.7	1.3	1.8
ケーブルおよび線	0.6	0.4	0.1	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1
石油および石油製品	6.4	5.9	10.6	11.7	16.6	14.6	12.3	13.8	32.8
化学品	0.9	1.1	0.8	0.7	0.8	1.8	1.1	1.4	1.5
その他	57.3	51.9	45.2	34.9	24.7	20.9	18.0	15.1	24.9

（出所）　1953～59年は「東洋学の諸問題」60～61年はソ連貿易省計画経済局編「ソ連貿易統計年鑑」により算定、但し、経済企画庁調査局編世界経済白書より転載

石油および石油製品等、中国の経済発展にとって重要な産業部門の製品であり、したがってまた中国の再生産の物財バランスにとって非常に重要な地位をしめている財だからである。つまり、量的にみれば、あるいは原料資源という観点からみれば中国貿易の第二効果は僅かであるといえるかも知れないが、輸入品の中国再生産構造における地位という観点からすればこの効果も決して無視出来ないものであるということが出来よう。

第三効果については本稿の主要考察対象の一つとなっているので項をあらためて述べることにしよう。

① この問題は必ずしも外国貿易に関してのみ妥当するものではない。一般に社会主義経済においては利用されるのは資本主義的母班乃至形骸としての価値・価格・貨幣・利潤等であり、直接の目的乃至効果は生産性の増大あるいは生産力の増大である。たとえば社会主義企業において利潤率を企業の生産活動の成果の指標とする場合にも、利潤率の増大が生産性の増大、死せる労働の節約をも含む労働の節約、生産力の増大を示す限りでのみその正当性を主張しうるのであって、資本主義社会におけるように利潤率の増大そのものが生産活動の成果とはなりえない。このことは次のような簡単な数式を利用して説明するとよくわかる。

$$p' = \frac{pq-(p_1q_1+p_2q_2)}{p_1q_1+p_2q_2}$$

（但しp'＝利潤率、p＝販売価格（引渡し価格）、q＝販売量（引渡し量）、p_1＝単位労働時間当り賃金、q_1＝労働量、p_2＝原材料価格、q_2＝使用原材料の量、減価償却部分は省略）

p'を高めるためはpqを出来るだけ大きく、$p_1q_1+p_2q_2$を出来るだけ小さくすればよい。もしpが固定されているか、あるいはqの増大とは無関係に変化するような状況にある場合にはpqを大きくするためにはqつまり販売高したがってまた生産量を高めなければならない。これは社会主義社会の場合である。しかしpがqの変化に応じて変動し、しかもqと変化方向が逆の場合はqを大きくすることがpqを最大にしうる道ではない。このことは資本主義社会では価格pの低下を防ぎ、したがって販売額pqの低下を防ぐために、生産量qをセーブするという屢々みられる事実によって説明される。p_1q_1, p_2q_2についても同じようなことがいえる。社会主義社会においては労働量q_1や使用原材料q_2を出来るだけ節約することによってp_1q_1及びp_2q_2を出来るだけ小さくし、したがって原価$p_1q_1+p_2q_2$を出来るだけ小さくすることが望まれる。これが真の社会主義的節約である。

しかるに資本主義の場合には賃金や原材料価格の情況如何では労働及び原材料の乱費もおこりうる。何故ならq_1とq_2を最小にすることがp_1q_1, p_2q_2を最小にするとは限らないし、したがって$p_1q_1+p_2q_2$を最小にするとは限らないからである。勿論社会主義社会ではp, p_1, p_2等の価格の設定の如何によっては必ずしも社会主義的効果からみて望ましくない状態が生じないことはない。（たとえば賃金p_1と原材料価格p_2の設定をあやまると労働集約的なものが不当に有利になったり、反対に原材料集約的なものが不当に有利になったりして、真の社会主義的節約が行なわれない場合がおこりうる）この意味からして社会主義社会の価格政策つまり価値法則の正しい利用が特に重要となる。が、いずれにしても社会主義社会において直接効果の対象となるのはq, q_1, q_2であって、p', p, p_1, p_2ではなく、後者はただ利用対象となるだけであることは右の式からうかがわれよう。

② 拙稿「中国の外国貿易の効果と収益性」東亜経済研種第三六巻第一号一八〇頁参照

③ たとえばA財輸入の第一効果はA財輸入に必要な資金をA財使用産業部門に投下した場合に、その部門で単位期間内に達成されるのであろう増加産出量をA財使用によって達成されたその部門の増加産出量と対比するという方式で測られるが、実際にはこの計算は他の関聯条件が幾多あるのでかなり困難である。

④ 米沢秀夫「中国対外貿易の動向」アジア経済旬報一九六一年五月中旬号、および「日中貿易白書」日中輸出入組合一三一頁参照

二

第三効果は国際的専門化による労働の節約、いわゆる比較生産費原理にもとづく労働の節約であるから、その大いさは基本的には輸出品に含まれている自国労働と、輸入品に含まれていると見做される自国労働相当分との対比によって計られる。いいかえれば輸出品に含まれている自国労働が小さければ小さいほど、そして反対に輸入品に含まれていると見做される自国労働相当分が大きければ大きいほど、国際分業にもとづく労働の節約という効果、つまり貿易の第三効果は大きいわけである①。もっとも輸出と輸入は個々の商品毎に直結しているわけではなく、輸出は輸出、輸入は輸入としてそれぞれの商品で独立に行なわれているわけであるから、つまりA商品はB商品を輸入するために

輸出され、C商品はD商品の輸出によって輸入されるというようになっているわけではなく、AD商品の輸出とBC商品の輸入とはそれぞれ独立に行なわれているわけであるから実際の計算は輸出入別々に行なわれる。すなわち輸出については輸出品に含まれている自国労働とその輸出によって得られる世界貨幣（外貨）に含まれていると見做される自国労働相当分の対比によって、また輸入についてはその輸入品に含まれていると見做される自国労働相当分とそれの支払に要する世界貨幣（外貨）に含まれている自国労働との対比によって行なわれる。ところで世界貨幣（外貨）に含まれていると見做される自国労働はある期間においては不変であり、同時に輸出入によって変わらないと考えられるから、結局第三効果の大いさは輸出についてはどれだけ少量の自国労働でどれだけ多額の外貨が得られるか、また輸入についてはどれだけ少額の外貨でどれだけ多量の自国労働相当分がえられるかということによって計られる。そしてこの結果を輸出入にわけて各商品で比較することによって各商品の輸出あるいは輸入の第三効果の相対的大いさが決定される。いうまでもなく当該輸出品に含まれている自国労働が少量であればあるほど、そして得られる外貨が多額であればあるほどその輸出品の輸出効果は大きく、反対に当該輸入品に含まれていると見做される自国労働相当分が大きければ大きいほど、そして支払われるべき外貨の額が小さければ小さいほどその輸入品の輸入効果は大きい。

わたしたちは前稿においてこの効果の大いさを計る各種の計算式（輸出入収益性計算式）を社会主義諸国の主要見解にしたがって紹介したが、本稿ではその最も簡単な計算式をもちいて、中国におけるこの輸出入の第三効果（これを輸出効率、輸入効率とよぼう）を各商品毎に計算してみよう。もっとも簡単な計算式は輸出については

$$NE=\frac{E_p}{K_p+\alpha}$$

NE＝輸出効率指数

E_p＝輸出価格（fob）

K_p＝国内価格

α＝外国貿易機関の諸掛り

である。この計算式はかつてポーランドで用いられていた計算式と事実上同じものであるが②、それはそれとしてこの計算式の意味は国内価格と輸出価格（外貨取得高）との対比であるが、各商品の効率の相対的比較であるから輸出価格は外国通貨で表示したもので充分である。たとえばA商品の卸売価格が外国貿易機関の諸掛りを含め三〇〇元であり、その輸出価格が五〇ドルだとすると

$$NE=\frac{50\text{ドル}}{300\text{元}}=0.166\text{ドル/元}$$

あるいは

$$\frac{1}{NE}=\frac{300\text{元}}{50\text{ドル}}=6\text{元/ドル}$$

となる。いまB商品の卸売価格が外国貿易機関の諸掛りを含めて二五〇元であり、輸出価格が四〇ドル、C商品のそれが二〇〇元、四五ドルとすると

B商品の $NE=0.16\text{ドル/元}$ or $\frac{1}{NE}=6.25\text{元/ドル}$

C商品の $NE=0.255\text{ドル/元}$ or $\frac{1}{NE}=4.44\text{元/ドル}$

で輸出効率の最も高い商品はCであり、ついでABの順になる。

次に輸入については

$$NI=\frac{K_p-\beta}{I_p}$$

NI＝輸入効率指数

K_p＝輸入品の国内価格

β＝輸入のための外国貿易機関の諸掛り

I_p＝輸入価（cif）

この計算式もポーランドで用いられたものと基本的には同じものであるが③、この式の意味は輸入品の国内価格と対外価格の比であり、ただ輸出効率式とちがうところは対外価格と国内価格との分子分母関係が恰度正反対であるということと、外国貿易機関の諸掛りの記号が＋（プラス）と－（マイナス）という対象的関係にあるということである。なおもう一つ重要な相違は輸出効率式の場合は国内価格が明確であるが、輸入効率式の場合は国内価格が商品によって不明確であるということである。即ち輸入商品と同じような品質種類の商品が国内で生産されている場合はよいが、輸入商品（と類似の商品）を全く国内で生産していないような場合にはこの国内価格は社会主義国ではかなり恣意的なものとなる。このような事情から輸入効率計算は社会主義国において現在輸出効率計算よりかなり遅れているのが現状である。が、それはそれとして右の計算式を例をもってしめせば、ある商品の輸入価格が四〇ドルでその国内での引渡し価格が三〇〇元で輸入諸掛りが五〇元とすると

$$NI=\frac{300\text{元}-50\text{元}}{40\text{ドル}}=6.25\text{元}/\text{ドル}$$

いうまでもなくこの値の大きい商品ほど輸入効率は高くなるわけである。

扨て中国の現状において輸出入効率を各商品毎に検討するに、残念ながら諸掛りの値がわからないし、何よりも国内価格としてもちいられた上海卸売物価がどの程度正しい国内価格であり、またそれが価値を反映しているかが疑問なのであくまで大ざっぱな推定にすぎないが、溝口敏行氏の作成した価格表を利用させてもらえば、各商品の比較効率は第二表のようになっている。先ず輸出からみてみると、この値は$\frac{1}{NE}$をとってあるから値の大きいものほど輸出効率が低いことになるが、効率の高いものでは対ソ連向商品で小麦、大豆、葉たばこ、桐油、窓ガラスなどとなっており、また対西欧向商品では米、大豆、卵となっている。これに対し効率の低いものでは対ソ連向商品で食塩、綿花、米となっており、対西欧向商品では砂糖、綿花となっている。対ソ連向商品と対西欧向商品との間で共通して効率の高いのは大豆であり、共通して低いのは綿花である。両者の間でまた対象的になっているのは米であって対ソ連向商品としては効率は低い方だが、対西欧向商品としては高い方である。しかし米を除いて両者の間で効率上著しい相違はなく大体相応していると考えてよい。

対ソ連邦向商品のうち比較的効率の高い商品で輸出額の比較的高いものは大豆、綿織物、葉たばこであり、いずれも一億ルーブルをこえている。他の比較的効率の高い製品、桐油、小麦、銑鉄、ガラスなどはたいしたことはなくいずれも千万ルーブル代である。が、反対に効率の低いものでもたとえば米などはその輸出額が高い。そこで対ソ連輸出については次のようにいうことが出来る。すなわち大体において大きな輸出額を占めるものは効率が高いが、ものによっては反対の場合もあり、したがって対ソ輸出について厳密に効率を考えて輸出が行なわれているかどうかは疑わしい。

対西欧向ではイギリスに輸出されている綿花、砂糖の効率が低いがこれらは最近では殆ど輸出されていないようで

第2表　上海卸売物価と貿易物価の比較（1956年）

（輸出）　（単位トン）

商品＼価格	上海卸売物価(1)（新人民元）	対西欧(2)（ドル）	対ソ連(3)（ルーブル）	(1)/(2)	(1)/(3)	左欄のドル換算	備考
米	272(1)	156	56.5	1.7	4.8	(19.2)	(1)粳米と仙米の平均
小麦	199	(フィンランド)	385		0.5	(2.0)	
大豆	215	115 (イタリア)	392	1.9	0.5	(2.0)	
砂糖	1,354	95 (イギリス)		14.3			
豚肉	1,340		〔464〕(2)		3.5	(14.0)	(2)冷凍肉
卵	1,044	786 (イギリス)		1.3			
食塩	213		31.6		6.7	(26.8)	
葉たばこ	2,135	655 (西ドイツ)	3340	3.3	0.6	(2.4)	
桐油	1,090	530 (フランス)	1855	2.1	0.6	(2.4)	
綿花	1,801	195 (イギリス)	292	9.2	6.2	(24.8)	
綿織物（1000ヤード）	694(1)		561		1.2	(4.8)	(1)白布
化成ソーダ	956		264		3.6	(14.4)	
炭酸ソーダ	640		148		4.3	(17.2)	
セメント	73		45		1.6	(6.4)	
窓ガラス（1000平方メートル）	152		174		0.9	(3.6)	
銑鉄	220		180		1.2	(4.8)	

（輸入）

商品＼価格	上海卸売物価(1)（新人民元）	対西欧(2)（ドル）	対ソ連(3)（ルーブル）	(1)/(2)	(1)/(3)	左欄のドル換算	備考
小麦粉	426						
砂糖	1,354	95 (フランス)	516(2)	14.3	2.6	11.2	(2)1957年値
生ゴム	6,000	2,350 (イギリス)	3,133	2.5	1.9	4.6	
鉄棒	660	342 (イギリス)		1.9			
鋼板	1,140		542		2.1	8.4	

黒鉄管	1,290		910		1.4	5.6	
鋼線	8,170	1,800 (スイス)	4,750(2)	4.5	1.7	6.8	(2) 銅および銅線
セメント	73		117		0.6	2.4	
ガソリン	832		219(1)		3.8	15.2	(1) 1947年値
ディーゼル	462		171		2.7	10.8	
灯油	840		180		4.7	18.8	

石川滋編「中国経済発展の統計的研究Ⅲ」105頁より

第3表　対ソ輸出主要商品構成　　単位100万ルーブル

	1956	1957	1958	1959	1960
鉱石および金属精選鉱	301.9	359.6	296.1	293.2	55.1
銑鉄		18.6	39.3	27.5	10.7
非鉄金属及び合金	201.7	207.0	195.6	219.6	44.0
うち錫	129.7	182.1	157.4	166.8	31.3
生ゴム	51.7	148.8	88.2	72.3	6.4
セメント		53.7	59.2	34.1	7.6
繊維原料	234.2	196.1	150.2	366.5	58.8
葉たばこ	119.8	164.0	125.7	118.7	11.1
桐油		27.0	31.6	35.4	3.9
落花生	143.2	75.5	31.4	28.6	3.7
大豆	214.4	211.9	200.4	269.7	32.1
肉および加工品	252.6	135.3	266.3	168.4	16.7
米	257.1	101.7	243.2	330.3	49.7
野菜および果物	81.4	108.3	130.7	125.0	16.4
植物油	103.0	52.7	84.5	84.1	8.4
綿織物、毛織物	262.6	344.3	348.8	622.1	125.6
その他繊維織物					
総額	3,056.9	2,952.5	3,525.0	4,401.1	763.3

1960年は新ルーブル、中国政治経済綜覧及び新中国年鑑1962年版より

第4表　中国の西欧諸国向け国別主要商品輸出額（1959年）

（単位1000ドル）

品目	金額	品目	金額
採油用種子		穀物	
西独	22,434	西独	1,555
（うち大豆）	19,899	（うち米）	1,205
イギリス	6,063	イギリス	652
フランス	969	フランス	756
（うち大豆）	—	ベルギー（米）	2,040
イタリア	4,053	小計	5,003
デンマーク	10,622	動植物性油脂	
オランダ	5,063	西独	3,769
フィンランド	1,168	（うち桐油）	864
ノルウェー	562	（うち落花生油）	1,609
オーストリア	63	イギリス	885
ベルギー	316	（うち桐油）	628
小計	51,313	フランス	137
卵及び卵製品		（うち桐油）	—
西独	4,711	（うち落花生油）	—
イギリス	2,340	イタリア	1,050
フランス	78	小計	5,841
イタリア	818		
小計	7,947	総計	118,100

外務省東西通商課編「東西貿易情報」25号（36年3月1日）

ある。これに対し効率の高い卵および卵製品はイギリスのみでなく西独、フランス、イタリアにも輸出されていて一九五九年ではこの四カ国で約八百万ドルとなっている。卵以外では対西欧向では米、大豆、桐油の効率が高くなっているが、内容は大体次のようである（第四表参照）。これらの表で伺われるように、効率の高さと輸出額とは大体において相応していると考えてよい。なおソ連、西欧に共通した輸出効率指数をルーブルを四対一の比率でドルに換算することによって算出しておいたが、これによると葉たばこを除いて対ソ連輸出の方が効率がわるくなっている。しかしこのような換算がどの程度正しいかどうかはなお検討の余地がある。次に輸入についてであるが、ソ連邦からの輸入品のうち効率が高いものは、灯油、ガソリンとなっており低いものではセメント、黒鉄管等となっている。また対西欧輸入品では砂糖の輸入の効率が高く、鉄棒などが低くなっている。中国の対ソ対西欧輸入品構成は第六表及び第七表の通りであるが、輸入品の場合は先にものべたように効率計算の信憑性が輸出品の場合より少なく、また輸入品の圧倒的部分を占める機械、設備、プラントの効率計算が出ていないので、あまり参考にはならない。輸入効率についても輸出効率と同様にルーブル対ドルを四対一で換算して、ソ連、西欧共通の輸入効率指数を出してみると、今度はむしろ砂糖を除いてソ連の方がよくなっているという結果がえられる。

第5表　中国の西欧向け主要輸出品の割合（1959年）

品目名	比率(%)
採油用種子	43.4
繊維原料	13.6
非鉄金属及卑金属	7.6
卵製品	6.7
穀類	5.3
油脂類	4.9
原皮び皮革	2.1
合計	83.6

外務省東西通商課編「東西貿易情報」25号(36年3月1日)

輸出入効率についてのこれまでの不充分な統計的事実から一応の結論を述べてみよう。輸出品ではなお消費財、原材料関係品が大きな割合を占めているが大まかにいって効率の高いものの輸出額は大きい。しかし、反対に効率の低いもので

かなり輸出されている事実は、輸出入のバランスを維持するため、輸入品、特に機械、設備、コンプリートプラントを輸入するための外貨獲得という意味が強く含まれていると思われる。この観点からすれば、第三効果としての効率効果（労働節約効果）より、第一効果としての生産能性増大効果になお中心がおかれているかのようである。これは中国がなお社会主義工業化の途上にあり、国民経済のバランスより急速な経済成長に、また貿易依存度が比較的低く第三効果の不利が国民経済にとって重大な影響を及ぼさないと考えられていることからくるものと思われる。但し、対西欧輸出については効率と輸出額とが少数の事例にすぎないがかなり相応しており、この限りでは対西欧貿易については最近では効率的に貿易が行なわれているかの如くである。つまり輸出に関しては対西欧の輸出において、商業ベースにのっとった貿易を中

第6表　ソ連よりの輸入主要商品構成

（単位100万ルーブル）

	1956	1957	1958	1959
総額	2,932.1	2,176.4	2,536.0	3,818.3
機械及び設備	1,219.0	1,086.1	1,271.8	2,390.0
総合企業の設備及び資材	867.8	836.1	664.6	599.0
自動車運輸及ガレージ設備		20.8	246.6	137.2
貨物自動車		5.6	207.0	101.5
石油製品	284.6	304.7	309.5	416.0
ガソリン	140.5	125.7	104.2	207.3
圧延鋼	174.7	85.6	147.1	117.6

ソ連外国貿易誌より

第7表　中国の西欧よりの主要輸入品目の割合

	1959	1960
	%	%
鉄鋼	22.3	25.3
銅及び銅製品	14.8	7.3
化学品	14.8	8.2
機械	10.8	10.7
化学肥料	9.3	10.3
繊維品	6.4	

外務省東西通商課編「東西貿易情報」24号（36年2月16日）

国は行なっているとも考えられる。

輸入品は生産財特に機械、設備、プラントが中心であり、やはり第一効果、第二効果に重点があると考えられる。品目別には、たとえばセメントは効率上かなり不利な輸入品でありながら、他方輸出もされているというような不合理な情況もみられる。また効率上不利となっているソ連向米、綿花は国内の価格制度からくるのか、あるいは他の面からくるのか不明であるが、いずれにしても問題となろう。なおソ連、西欧を区別せず共通した効率指数を限られた統計的資料から出してみれば、輸出効率においては対西欧がよく、輸入効率においては対ソ連がよい傾向がみられる。つまり中国はソ連に対しては輸出入品ともに西欧より低廉な価格で取引しているという傾向がみられる。

① 国際分業の効果のうち比較生産費原理にもとづく労働節約効果はここでみられるように、ただ自国労働に関係するのみである。つまり自国労働のより少量を与えて、自国労働のより多量分をうけとる＝節約するということ、同じことだが自国労働のより多量分をうけとる＝節約するためにより少量の自国労働を与えることがこの第三効果である。だから輸出入品に他国の労働がどれだけ含まれているかはこの効果に関してはどうでもいいことであり、ここに先進国と後進国の間でも平等互恵の貿易なら先進国のみならず後進国も労働節約という効果をうけることが出来る理由が存するのである。もっともこのことから先進国と後進国の間に不等労働量交換があり、ここから資本主義国間の関係ではある種の搾取関係が生まれ、社会主義国間の関係でもある種の不平等が生まれるという事実を否定することにはならない。これについては拙稿「社会主義世界市場における固有の価格基盤について」本誌第三十六巻第二号十二～三頁参照

② В. Шагалов, О методах определения экономической эффективности внешней торговли в Польше, *Внешняя торговля*, 1962, No. 3, стр., 19.

なおシャガロフの式では分子と分母が逆になっている、つまり私の式の $\frac{1}{NE}$ が効率指数になっているが、これはポーランドのズローチとルーブルの交換比率がズローチにおいて大きく、したがって $\frac{1}{NE}$ でないと少数点以下の値となり計算上複雑になる

からであると推察される。同様な理由で他の東欧諸国の計算式も皆私の式と分子分母が逆になっている。私も計算の時は $\frac{1}{NE}$ で行なった。

③ Там же, стр. 21.

三

ここでは前項でのべたことを社会主義市場と資本主義市場とにわけて地域別にもう少し補足してみよう。現在中国貿易の七〜八割は社会主義国となっており、またそのうちの過半数がソ連邦との貿易となっている。ソ連について多いのは東独、チェコスロヴァキアとなっているが、いずれも社会主義圏貿易の一割以下となっておりソ連貿易の比ではない。資本主義圏との貿易では最近では漸次西欧諸国との貿易の割合がふえている。

中国貿易の中心は何といっても対ソ貿易であって輸出入合計して八〇億ルーブル（一九五九年）で中国貿易総額の五五・八％をしめている。したがって中国にとってそれだけ重要であり貿易効果も充分考えられなければならないわけだ。両国とも自然条件にめぐまれており、自己完結的経済構造を形成する能力をもっており、このため、輸出品、輸入品ともその種類が多い。しかし大体の傾向は先進国対後進国という関係の貿易品構成で、ソ連側からは機械、設備、コンプリートプラント、鉄鋼その他の金属製品が供給され、中国側からは金属鉱、繊維原料、食料、日用品等が供給されている。ソ連側から供給されている財は中国の経済発展にとってきわめて重要な生産手段であり、したがって第一効果第二効果とも中国にとって大きいと考えられる。ただ第三効果つまり貿易効率が先にもみたように、前の二効果にくらべるとやや劣るように思われる。しかし中国の工業化が一定の発展水準に到達しつつある現在、今後この効果も充分考慮される必要があろう。

第8表　中国の地域別貿易構成（%）

	貿易総額	社会主義圏				資本主義圏		
		全地域	ソ連	東欧	アジア	全地域	西欧及日本	その他
1952	100.0	78.0	57.3	19.0	1.7	22.0	5.2	16.8
1953	100.0	75.5	56.4	16.6	2.5	24.5	9.1	15.4
1954	100.0	80.0	50.0	24.5	5.5	20.0	7.5	12.5
1955	100.0	80.7	50.7	25.2	4.8	19.3	8.6	10.7
1956	100.0	75.3	53.7	17.2	4.4	24.7	11.9	12.8
1957	100.0	75.0	52.0	17.4	5.6	25.0	11.6	13.4
1958	100.0	74.6	51.2	23.4		25.4	12.9	12.5
1959	100.0	77.2	55.8	21.4		22.8		

中国政治経済綜覧　1962年版より

対東欧諸国の貿易はこの数年やや足ぶみ状態にある。第八表でみればわかるようにこれまで二五%をしめていた割合が、五七年以後二〇%をわっており、代りに西欧諸国とアジアの社会主義国が伸びてきているという実状である。貿易品構成はチェコスロヴァキアや東ドイツのような進んだ社会主義国とブルガリア、アルバニアなどの後れた社会主義国とでは必ずしも同じではないが、しかし一般的傾向として東欧側からは各種機械、設備、コンプリートプラント、石油製品が供給され、中国側からは食料、繊維品、工業原料が供給されるという型の貿易が行なわれている。したがって貿易の効率についてはただ全体として規模が小さいということだけで、大体対ソ連貿易の場合と類似していると考えられる。対東欧諸国の貿易がやや足踏み状態にあるのは、輸送距離と運賃の問題、東欧諸国の成長率と中国の成長率との間のギャップの問題、あるいはイデオロギー上の問題なども若干あるかも知れないが、一つの大きな理由として次のことがあげられると思われる。すなわち東欧諸国は中国やソ連とちがって個別的には自然条件にめぐまれず、自己完結的経済構造をつくるのに不充分な環境にある。したがって外国貿

易に依存する程度も高く、国際分業特に社会主義分業の利益を最大限に利用しようとする意欲も旺盛である。このため相互間の貿易も生産の計画的相互調整のうえに行なわれ、貿易の第三効果たる貿易効率もかなり詳細に検討された上で行なわれている。しかるに中国側からする社会主義国際分業及び貿易に計画的に参加する態勢、貿易効率を充分考慮して貿易協定を結ぶ準備になお不足するところあるということである。

対西欧貿易では西ドイツ、イギリスが大きな地位をしめているが、西欧諸国全体では六億ドルで対東南アジア貿易五億ドルを凌駕している（以上一九五九年）。商品構成は機械、設備、化学品を輸入し、食料、原料を輸出しており、殆ど完全な意味においての先進国—後進国型の貿易となっている。（ソ連や東欧諸国に対しては相対的に少ないとはいえ中国から機械や金属製品の輸出が行なわれているが、西欧諸国に対してはこれらの輸出は殆ど皆無である）したがって、量的にはなお少ないとはいえ第一効果、第二効果ともに一応大きいとみなしてよいであろう。また先にもみたように、限られた資料によれば第三効果たる貿易効率も事実上考慮した貿易が行なわれているようである。つまり対西欧貿易はかえって効率的な商業ベースにかなった貿易が行なわれているということも出来よう。対西欧貿易が最近伸びている一つの理由はここにあるとも考えられる。

東南アジア諸国への貿易はインドネシア、マレーなどが依然として主要国で、大体総計して五億ドル代を前後している状態である。東南アジア諸国貿易が特に変動なくむしろ停滞ぎみなのはなんといっても貿易収支のアンバランスにあり、たとえば一九五九年を例にとってみると合計四億九千万ドルのうち中国からの輸出額が三億四千万ドルで輸入額が一億五千万ドルと輸入額は輸出額の半分以下という状態である。輸出品の中心は綿製品であとセメント、鋼材、ガラス、などとなっており輸出効率は比較的わるくないと思われる。また輸入品は砂糖、ゴム、綿花、ジュートなど比較的輸入効率のたかいものあるいは輸出効率の低いと考えられるものが輸入されており、輸入効率もわるいと

第9表　中国の対資本主義圏地域別貿易の動向（単位100万ドル）

	中国の輸出				中国の輸入			
	1958	1959	1960	1961	1958	1959	1960	1961
欧米諸国	194.5	208.2	242.3	187.8	472.7	389.5	388.9	308.1
北米・カナダ	5.7	5.2	6.1	3.4	7.3	1.7	9.1	120.6
ヨーロッパ	188.8	203.0	236.2	184.4	465.4	387.8	379.8	187.5
その他諸国	496.1	397.2	434.0	397.8	306.7	273.1	320.1	414.5
ラテン・アメリカ	2.4	2.5	4.0	10.0	11.4	2.8	41.4	79.0
中近東	22.5	26.2	26.2	24.2	43.8	39.4	58.0	30.4
アジア・極東	437.6	354.0	385.0	348.2	208.8	172.3	162.8	121.7
大洋州	9.4	10.2	11.5	8.5	29.8	37.1	33.1	170.3
アフリカ	24.2	4.3	7.3	6.9	12.7	21.5	24.8	13.1
合計	690.6	605.4	676.3	585.6	779.2	662.6	709.0	722.6

経済企画庁調査局編、世画経済白書、62年度版、240頁より

はいい難い。しかし何せ輸出入のアンバランスが大きく、輸入量が少さいので第一効果は小さい、第二効果も大きいとはいえないようだ。

その他の地域ではラテン・アメリカ、大洋州が伸びているが、これらの地域はまだ絶対額において小さく、特に問題の対象とならない。ラテン・アメリカでは周知のようにキューバとの間の関係が密接化し経済交流も盛になりつつあるが、キューバから輸入している砂糖はなお一九五九年において一〇万ドル程度であり、まだ殆ど問題にならない。

四

これまで述べてきた貿易の効率算定はある財がそれに対象化されている労働によってその国の労働のどれだけの量を節約しうるかを、他の財との相対的比較においてしめしたものである。しかしこの効率算定はたとえこれが完全に出来たとしてもなお次のような問題が残る。すなわちたとえばA財の輸出効率がB財のそれよりも高い

としても、A財を生産するためにはB財を生産するよりもはるかに大きな基本投資額を必要とする場合には、A財の輸出がB財の輸出にくらべて効率的であるとはいい難い。だから効率をより長期的に考える場合には基本投資額をも考慮することが是非とも必要となってくる。ここにこれまで述べてきた経常的貿易効率に対して基本投資の貿易効率の算定式が考えられなければならない。一番簡単な公式は

$$N=\frac{I}{\Sigma D}$$

N＝投資必要度

I＝当該製品生産の最終加工段階において一定の生産能力を増大さすために投資された基本投資額

ΣD＝この投資によって増大した生産能力が年間に取得した外貨高

いうまでもなくNの値が小さいほど、つまり$\frac{1}{N}$の値が大きいほど基本投資の輸出効率は高いことになる（したがって$\frac{1}{N}$が輸出投資効率）たとえばいまAB財があり、A財生産の最終加工段階で生産設備を拡大しそのために一万元が必要であり、その結果A財輸出が増大し二千ルーブルだけの外貨取得の増加があったとしよう。同じようにB財では二万元の生産設備の拡大があり、これに応じて三千ルーブルの外貨取得増加があったとしよう。この場合には

A財……$N=\frac{10000}{2000}=5$元/ルーブル

B財……$N=\frac{20000}{3000}=6.6$元/ルーブル

でA財の効率が高いことになる。

右の公式は生産の最終加工段階のみの基本投資だけを対象としているが一層正確には前段階の基本投資をも対象にしなければならないだろう。この場合には次のような公式になる

$$N=\frac{I_1+I_2+I_3+\cdots+I_n}{\sum D}=\frac{\sum_{j=1}^{n} I_j}{\sum D}$$

扨て中国の輸出においてこの N を品目別に一つ一つ計算することは資料の都合上技術的に今は出来ないが、一つ大ざっぱであるが与えられた資料で、重工業品、軽工業品、農業品の三大グループの投資効率を計算してみよう。第一〇表をみると、最近では投資額は貿易額の二倍をこえ前者は国民所得の二〇%、後者は一〇%となっている。一九五五年までは貿易額の方が投資額より大きかったからこの数年間の投資増加率は貿易の増加率をはるかにオーヴァーしていたわけだ。もっとも投資増加率のいちじるしいのは重工業で一九五八年は一九五二年にくらべて一一・八倍、次に軽工業で同じく五・三倍、次に農林業で四・四倍となっている。ところで同じ期間の貿易の増加は二倍であるが、第十一表にみるようにこのうち工鉱業品が三・七倍、農副業生産加工品が三・九倍、農副業生産物が一・四倍である。いま便宜上、第十一表における工鉱業品の二分の一を重工業品として、その残りの二分の一と農副業生産加工品を軽工業品として、また農副業生産物を農業品としてみなすならば、輸出上の投資効率は軽工業品において最もよく、次いで農業品、重工業品の順になっていると思われる。いいかえれば、外貨取得に必要な投資必要度は軽工業品において最も小さく、農業品、重工業品の順において大きくなるように思われる。計算は次のようである。

重工業品の投資増加……148.4億元

重工業品の輸出増加……306.1百万ドル

第10表　中国の国民所得、投資、貿易額　（単位億元）

	実質国民所得	投資						貿易
		総額	工業	うち軽工業	重工業	農林業	貿易	総額
1952	611.3	43.6	16.9	4.1	12.8	6.0	1.2	64.6
1953	696.9	80.0	28.4	5.0	23.4	7.7	2.7	80.9
1954	736.6	90.7	38.3	6.7	31.6	4.2	3.9	84.7
1955	784.5	93.0	43.0	5.3	37.7	6.2	3.5	109.8
1956	894.3	148.0	68.2	9.4	58.8	11.9	7.6	108.7
1957	935.4	138.3	72.4	11.0	61.4	11.9	3.7	104.6
1958	1253.4	267.0	173.0	21.8	151.2	26.3	5.7	128.7
1959	1523.1							147.1

新中国年鑑1962年版及び中国政治経済綜覧より

したがって $N_1=\frac{14840}{306.1}=48.5$元/ドル

軽工業品の投資増加……17.7億元

軽工業品の輸出増加……1146.0百万ドル

したがって $N_2=\frac{1770}{1146}=1.5$元/ドル

農業品の投資増加……20.3億元

農業品の輸出増加……335.0百万ドル

したがって $N_3=\frac{2030}{335}=5.9$元/ドル

故に $N_2<N_3<N_1$ である

右は一九五二—五八年の平均をとったことになるが、勿論非常に大ざっぱなものであくまで推察に過ぎないが、大体の傾向としては大過ないように思う。しかしながら最近では鉱工業品の輸出増加率がいちじるしくなっているから重工業品の輸出投資効率も漸次高まりつつあると考えられる。たとえば一九五七—五八年の鉱工業品の輸出増加は約五〇〇百万ドルと考えられる。したがって前と同じ計算によると同最間の重工業品の投資必要度はその投資増加が一〇〇億元と仮定して

第11表　中国の輸出構成　100万ドル

	工鉱業生産物	農副業生産加工品	農副業生産物	合計
1952年	225.2 (17.9)	286.8 (22.8)	745.9 (59.3)	1258 (100.0)
1958年	837.4 (27.5)	1126.7 (37.0)	1080.9 (35.5)	3045 (100.0)

第10表と同じ資料より算出

も

$$N=\frac{10000}{500}=20\text{元}/\text{ドル}$$

で前の半分に低下している。

なおこれまで述べてきた貿易の投資効率と前の項で述べた経常支出効率を併せ考えた輸出の総合効率指数

$$\epsilon=\frac{1}{NE}+N\cdot q$$

ϵ=総合指数　NE=輸出効率指数

N=投資必要度　q=効率係数

となり、この値が小さいほど輸出の総合効率は高いことを示す。しかしここではこれ以上ふれないことにする。

① Там же, стр. 23.

五

最後に結びとして社会主義世界体制内において中国が圏内貿易及び国際分業に占める役割とその恩恵について検討し、併せて中国貿易の将来の方向を暗示してみよう。

先ず中国が圏内においてもっている特徴というものを列挙してみよう。

(1) 中国は広大な人口と領土をもち原料資源に恵まれており、自己完結的産業構造をうちたてる能力をもっていること。

(2) 中国は現在主要生産物の総生産高において石油を除けばソ連邦に次ぐ地位を誇っている（第三表参照）。たとえば石炭採掘量においては全社会主義国合計の三分の一以上を占め、ソ連を除けば他の社会主義国の総合計より大きい。銑鉄の生産高においても中国はソ連以外の他の社会主義国の総合計の約二倍を生産している。鋼鉄およびセメントにおいてもその生産高はチェコスロヴァキア、東ドイツ、ポーランドを合わせたものに等しい。

(3) しかしながら六億の人口をもつ国にしてはこれらの生産高は他の社会主義国にくらべてかなり低い。たとえば人口一人当りの電力生産高において東ドイツが二〇〇九キロワット時であるのに対して中国はわずか四二キロワット時であり、北朝鮮の八二〇キロワット時の五%でしかない。銑鉄や鋼鉄の生産においても人口一人当りではソ連やチェコ、東ドイツなどの五%以下という状態である。この点から考えれば中国は社会主義国の中では後進国的地位にある。

(4) しかし同時に中国の成長率は非常に高く、社会主義陣営内の最高を誇っている。すなわち一九五一―一九六〇年の社会主義陣営全体の工業の年平均成長率は一三・六%であるが、同じ期間の中国の年平均成長率は二八・四%となっており、北ヴェトナムの二四・五%をさえ凌駕している。この数字の通りであるかどうかは若干疑問があるが、

第12表　社会主義諸国の主要生産物の生産高

	電力生産 (10億キロワット時)	同人口1人当り (キロワット時)	石炭採掘量 (100万トン)	同人口1人当り (キログラム)	石油採掘量 (100万トン)	同人口1人当り (キログラム)
全社会主義国	471.6		1162.7		167.5	
ソ連邦	292.5	1138	444.3	2055	147.9	547
中国	55.5	42	425.0	413	5.5	3.5
ポーランド	29.3	833	109.0	3430	0.19	
チェコスロヴァキア	24.4	1457	64.8	4447	0.14	
東ドイツ	40.3	2009	77.9	4296		
ハンガリー	7.6	655	17.1	1174	1.2	84.0
ルーマニア	7.6	342.4	3.6	183	11.5	627.7
ブルガリア	4.7	391	8.8	574		
北朝鮮	9.1	820	9.0	739		
アルバニア	0.6 *	95.6	3.2 *	170	0.73	268.0

	銑鉄生産高(100万トン)	同人口1人当り(キログラム)	鋼鉄生産高(100万トン)	同人口1人当り(キログラム)	セメント生産高(100万トン)	同人口1人当り(キログラム)
全社会主義国	88.9		105.1		87.2	
ソ連邦	46.8	191	65.3	266	45.5	161
中国	27.5	14.6	18.4	12.2	16.0	14.2
ポーランド	4.6	134	6.7	197	6.6	176
チェコスロヴァキア	4.7	280	6.8	409	5.1	305
東ドイツ	2.0	102	3.4	175	5.0	205
ハンリー	1.3	109.4	1.9	164.5	1.6	131.7
ルーマニア	1.0	40.8	1.8	51.7	3.1	142.4
ブルガリア	0.2	11.8	0.3	27.2	1.6	121.0
北朝鮮	0.7	42	0.6	39.0	2.3	134
アルバニア					0.5	51.5

注）いずれも1960年、但し人口1人当り生産高は1958年、＊は北ヴェトナム、モンゴールを含む экономика стран социалистического лагеря 1960年より

いずれにしても成長率がすぐれて高いことだけは事実のようだ。

以上のような中国がもつ四つの特徴から社会主義圏内貿易、国際分業の地位に関して次のようにいうことが出来る。

(1) 中国はソ連は別として他の社会主義国にくらべて貿易依存度が低い。中国の国民所得との比率における貿易依存度は一〇%程度であるが他の諸国は東ドイツ、チェコスロヴァキア、ハンガリーを中心としてはるかに依存度は高い。

(2) 中国はソ連型の貿易構造をもつ可能性をもっており、したがって一方では工業原料、食料を輸出すると同時に他方では鉄鋼、綿製品、機械類その他の工業品を輸出することが出来る。この貿易における二面的性格は中国が今後いよいよ工業発展をとげ工業品輸出の比重を漸次高めてゆくとしても、なお相当長期にわたって保持するものと思われる。つまり中国は東欧やアジアの社会主義国に工業原料と機械その他の工業品の双方を供給する地位を保つものと思われる。

(3) 中国は貿易依存度も低く、なお工業化の程度も低いので、ソ連、東欧、中国アジア社会主義国と社会主義圏を三つの分野にわけた場合、中国アジア圏の圏内貿易にしめる比重はなお小さい。すなわち一五%程度である。社会主義圏内貿易で最も高い比重を占めているのは東欧社会主義国であり、約五〇%を占めている。東欧諸国がセフの機構を中心に価格、生産、計画の相互調整というあらゆる面から圏内貿易の発展に努めてきたことがこの面からも伺われる。

(4) 中国は人口一人当り生産高でわかるように現在のところ社会主義圏では経済的には後進国の地位にあると考えられる。北ヴェトナム、モンゴル等のアジア社会主義国との関係は別として、ソ連や東欧諸国と中国の貿易関係は

第13表　社会主義圏内相互輸入割合（%）

	ソ　連	東　欧	中国アジア	合　計
1952	34.2	49.3	16.5	100.0
1953	33.7	48.7	17.6	100.0
1954	36.0	46.2	17.8	100.0
1955	35.2	47.6	17.2	100.0
1956	36.9	46.2	16.9	100.0
1957	35.2	52.2	12.6	100.0
1958	37.6	48.2	14.2	100.0
1959	36.2	48.4	15.4	100.0

u. n. Mouthly Bulletion of Statistics, June 1960.

「後進国型」貿易関係の形態を現在までのところとっている。つまり中国はこれらの国から、機械、設備、コンプリートプラント、金属製品を輸入し、工業原料、食料を輸入するという形態をとっている。このことが中国をして貿易の第一効果を重視させ、第三効果を比較的軽視させるという結果を生んでいる一つの理由である。

(5)　しかしながら中国の工業の成長率は非常に高く、絶対的生産水準はソ連に次いで大きい。したがって社会主義世界体制内における貿易、国際分業にしめる地位は今後いよいよ高まってゆくであろう。すなわち中国はソ連と同じようになお各種鉱石、大豆、小麦等の工業原料及び食料を東欧諸国やその他のアジア諸国に輸出し、これらの国の工業化、生活水準の向上に貢献するであろうが、同時に、機械、設備、金属製品等の重工業品を含む、工業製品を今後増大する割合で輸出し、この面からも工業化に貢献してゆくであろう。また輸入についてはこれまたソ連においてと同じように、機械、設備等、中国の工業化に必要な生産手段中心の工業品及び石油など中国に比較的不足している工業原料の一部の輸入が今後もいよいよ増加してゆくであろう。そしてこの場合これまで比較的軽視されていた貿易の効率についても充分考慮されるようにならなければなるまい。たとえば、綿花や食塩の輸出効率がわるいことになっているが、これを正しい効率計算によって適当に処置する必要がある。この効率計算については東欧諸国の経験を充分考慮する必要があろう。ソ連、東欧、中国アジアの三大社会主義圏は今

後互に先進国—後進国型の貿易、国際分業でなく先進国—先進国型の貿易、国際分業の型へと発展してゆくわけであるから、相互の経済関係の精密な歯車の組合せがいよいよのぞまれる。この意味から、効率計算、社会主義世界市場の価格形成、為替相場の設定、計画の相互調整等の問題を中国も今後いよいよ積極的に考慮しなければならないような時期が早晩おとずれるものと思われるし、またその必要があろう。